

ウェイスト・ピッカーがもたらす環境効果と福祉効果：
経済レベルおよび都市化の進展度合いが異なる
東南アジア4ヶ国の比較研究

Environmental and economic effect provided by
waste pickers: Comparative study of four countries in South-East Asian countries

H30助人10

代表研究者	佐々木 俊介	早稲田大学 アジア太平洋研究センター 助教
	Shunsuke Sasaki	Assistant professor, Institute of Asia-Pacific Studies, Waseda University
共同研究者	イリナ サフィトリ	マレーシア工科大学 都市計画学部 上級研究員
	Irina Safitri	Senior researcher, Department of Urban and Regional Planning, University of Technology, Malaysia
共同研究者	ニルー ウィドヤニシ	インドネシア国立大学 環境学部 研究員
	Niluh Widyaningsih	Researcher, University of Indonesia, Environmental Science School
共同研究者	クリスティーナ リム	デ・ラ・サレ大学 決定科学とイノベーション学部 准教授
	Cristina Lim	Associate Professor, De La Salle University, Decision Sciences & Innovation Department
共同研究者	イム モンゴエウン	王立プノンペン大学 環境学部 講師
	Yim Mongtoeun	Lecture, Royal University of Phnom Penh, Department

研究目的

本研究の目的は、一つの調査地（インドネシアのBantar Gebang廃棄物最終処分場）での長期滞在調査の結果とともに、複数の場所（マレーシアのSimpang Renggam廃棄物最終処分場、カンボジアのStung Mean Chey廃棄物最終処分場、フィリピンのPayatas廃棄物最終処分場）での短期調査の結果を用いることで、ダンブサイト・ウェイスト・ピッカーについて、下記の3点を明らかにすることである。

- A) どの程度の環境効果をもたらしているのかを解明
- B) どの程度の経済効果をもたらしているのかを解明
- C) 望ましい統合的廃棄物処理について検討

なお、A)については、具体的に、1) 個人平均の有価物収集量、2) 世帯平均の有価物収集量、3) 廃棄物最終処分場に運ばれる全廃棄物を分母としたリサイクル率、4) 有機系廃棄物を除いた廃棄物を分母としたリサイクル率について明らかにする。B)については、5) 平均個人収入、6) 平均世帯収入、7) 経済レベルについて明らかにする。

概要

1. 背景・目的・方法

途上国では、インフォーマル・リサイクル（ウェイスト・ピッカーによる廃品の回収を起点としたリサイクル）が、貧困層にとっての収入源となっているのみならず、自治体による廃棄物処理においても役割を果たしていると

ンである。

廃棄物最終処分場に運び込まれる廃棄物の総量は、月あたり222,579.8トンである。上述の1日あたりの総有価物収集量に30(1月を30日で計算)をかけて月あたりの総収集量とすると3617.6トンになる。ここから、廃棄物最終処分場に運ばれる全廃棄物を分母としたリサイクル率を推定すると1.6%となる。

廃棄物最終処分場に運び込まれる廃棄物の65から70%は生ゴミをはじめとした有機系廃棄物であるが、Bantar Gebang廃棄物最終処分場のウェイスト・ピッカーたちは有機系廃棄物の収集を行っていない。そこで分母から有機物廃棄物を除くと、リサイクル率は9.3%と推定される。

おおよそ1000トン(700トン程度のプラスチック・ペレット(ソフト・プラスチックから生産)と300トン程度のプラスチック・フレーク(ハード・プラスチックから生産))の再生原料が生産されていると推定される。

2-2. 経済への効果

ウェイスト・ピッカーの平均個人収入は、月収ベースで、USD 114.8(家内労働者を1人の労働者と見なさなかった場合)もしくはUSD 89.(家内労働者を1人の労働者と見なさなかった場合)であった。ウェイスト・ピッカーの平均世帯収入は、USD 179.5であった。

個人収入で見た場合、